

令和5年度入学 盛岡短期大部 一般選抜 国際文化学科 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	国際文化 学	安藤 至大	これだけは知っておきたい働き方の教科書	2015年 P24-33より 一部改変	筑摩書房

令和5年度 一般選抜

短期大学部

小論文 (90分)

学科・専攻名	ページ
生活科学科 生活デザイン専攻	1～2
生活科学科 食物栄養学専攻	3～4
国際文化学科	5～8

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 志望する学科・専攻により問題並びに解答用紙が異なるので注意ください。
- 3 この問題冊子は8ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 4 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督員に知らせください。
- 5 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 6 解答用紙(各学科・専攻別)には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入ください。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入ください。
- 8 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 9 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りください。

国際文化学科

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「皆さんは自分が食べるものや着る服などを自分で作っていますか？」

「私は料理が得意だから、自炊している」という人もいるでしょうが、ここで「自分で」作るというのは、食材をスーパーで買ってきて自分で調理するとか、布地を買ってきてミシンで服を仕立てるということではありません。土地を耕して、田畑で米や野菜を育てて、豚を飼うなど、最初から最後までをすべて自分でやるという意味です。このような生活を自給自足といいます。

もちろんそんな人はいないでしょう。

ヨットで遭難してしまい無人島にたどり着いたとか、誰もいない山奥で一人暮らしをしているなどといった例外的なケースを除けば、すべての人は他人が作ったものを消費して生活しているのです。

例えば、筆者は大学の教員として研究や教育をすることで収入を得ています。そのお金で家を借りたり、洋服や食材を買ったり、レストランで食事をしたりするわけです。

それでは私たちはなぜ自給自足をしないのでしょうか。理由を考えてみましょう。

それは自給自足をするよりも、一部の生産活動に特化して、その成果物を他の人の生み出したものと交換したほうが、結果的により多くのものを安定的に手に入れることができるからです。

なぜ一部の生産活動に特化したほうが良いのかには、いくつかの理由があります。まず多くの仕事を少しずつやるよりも、少しのこと(場合によっては一つのこと)に集中したほうが、経験を通じて熟練することができるため、より多くのものを生み出せる可能性があります。

例として、1日に8時間働ける環境で、魚釣りや野菜作りという二つの仕事があるケースを考えてみましょう。このときそれぞれの仕事に4時間ずつ費やした場合よりも、例えば魚釣りに特化した場合には、コツがわかって4時間だけ働く場合の2倍以上の魚を手に入れることができるでしょう。

また一部の仕事に特化することには、相対的に得意な仕事を集中的に行うことができるというメリットもあります。人によって得意な仕事や不得意な仕事が異なるとするなら、分業してその成果を交換することによって大きな利益が生まれるのです。先ほどの魚釣りや野菜作りの例を使って、このことの意味をもう少し考えてみましょう。

ここではAさんとBさんという二人に注目して、分業することにどのようなメリットがあるのかを考えます。もっとたくさんの方がいたとしても本質的なことは何も変わらないので、もっともシンプルな状況を考えることにします。

まず自給自足を行っているときには、二人がどのような生活をしているのかを見てみましょう。

ある南の島に、AさんとBさんの二人だけが住んでいます。この島は暗くなると危険なので、1日に8時間だけ働くことができます。

二人は、それぞれ自分の食べる物は自分で調達していて、魚釣りや野菜作りの両方をバランスよく行っています。これは魚と野菜のどちらかだけを食べるよりも、両方食べるほうが飽きませんし健康に良いからです。

ここでAさんとBさんを比べたときに、AさんはBさんと比べて魚釣りが得意で、反対にBさんはAさんよりも野菜作りが得意だったとします(このように他人よりも優れていることを絶対優位といいます)。

このとき限られた時間を有効に活用するためには、二人で役割分担をすることが効果的です。つまりAさんは魚釣りが中心の生活を行い、Bさんは野菜作りが中心の生活を行ったとすると、得意なことに時間を使っているため、二人が手に入れる食料の合計は自給自足の場合と比べて増えることとなります。

そして、その成果をうまく分け合うことで、自給自足の場合と比較して、二人ともよりたくさん食べることができます。この例から、得手不得手がある場合には分業して交換することにメリットがあることがわかります。

それでは次のようなケースではどうでしょうか。

Aさんは、魚釣りでも野菜作りでもBさんよりも優れています。同じ時間だけ働いたとして、Aさんは魚釣りならBさんの10倍、また野菜作りでも2倍の収穫を得ることができます。

このようにすべての面で優れている人と劣っている人がいる場合には、優れているAさんはBさんとは協力せずに、自分で両方の仕事をやったほうがよいように思いませんか？

じつは違います。

この話の興味深いところは、仮にどちらの仕事についてもAさんのほうがBさんよりも優れているとしても、やはり分業のメリットがあるという点です。

まず確認ですが、すべての面で劣っているBさんであっても、魚釣りはAさんの1/10くらいの仕事しかこなせませんが、野菜作りならば半分くらいのスピードで仕事をこなせる状況をここでは考えます。このとき絶対的にはどちらの仕事についても劣っているにせよ、差が小さいという意味では、Bさんにとっては野菜作りのほうがまだマシだといえます。

このとき自給自足の状況と比較して、Aさんは魚釣りを増やし、Bさんは「まだマシ」という意味で相対的には得意な(これを比較優位があるといいます)野菜作りに集中することで、二人分を合計したときの生産量が増やせるからです。

このように、すべての面で優れている人と劣っている人との間であっても、相対的に得意な分野に特化し、結果をうまく交換することにより全員が利益を得られることを比較優位の原理といいます。

ここで重要なのは、誰にでも比較優位はあるという点です。先ほどのケースでも、AさんはBさんと比べてすべての面で優れていますが、それでもBさんは野菜作りに比較優位がありました。比較優位という用語は、「比較してどちらが優れているか」という絶対優位の意味に誤用されることがあ

りますが、あくまで「絶対的に優れているかどうかではなく、相対的にマシなのはどちらか」という意味ですので注意してください。Aさんは、魚釣りも野菜作りも絶対優位にありますが、比較優位なのは魚釣りであり、野菜作りは比較優位ではないのです。

比較優位の原理は、さまざまな場面に応用することができます。まずは優秀なビジネスマンと新入社員との関係を考えてみましょう。

ある会社に、先輩の営業社員と若い新入社員が一人ずついます。話を簡単にするために、この会社では、お客さん向けの資料作成とコピー取りという二つの仕事しかないとしましょう。そして二人の社員を比較すると、当然のことながら、どちらの仕事に関しても先輩の営業社員のほうが高い能力を持っています。

このように資料作成でもコピー取りでも、先輩社員のほうが新入社員よりも効率的に行うことができるとしても、先輩がすべての仕事を自分で抱え込むのではなく、例えばコピー取りは新人に任せ、自分は資料作成により多くの時間を使ったほうが良いといったことが考えられます。

また、比較優位の原理は、複数の国の間で行われる国際貿易を考えたとしても成り立ちます。

(中 略)

さて、これまで見てきた比較優位の話が正しければ、それによりどんな人にも何らかの役割や居場所があるということになります。なぜなら、忙しく働いている人がいるときには、誰か手⁽¹⁾の空いている人が手伝うことによって、仮に手伝う側の人⁽¹⁾がすべての面で劣っていたとしても、両者が得をするからです。つまり比較優位の原理は「すべての人に出番がある」ということを私たちに教えてくれるのです。

しかし現実には、長時間労働で健康を損なう人がいる一方で、失業して困っている人もいます。このように現実が比較優位の原理の通りにはならず、一部の人だけが仕事を抱え込んでしまうのはなぜでしょうか？

それは比較優位の原理は、理屈としては完全に正しいのですが、このロジックが成立するためには、理論の前提条件が満たされていることが必要だからです。

例えば、仕事の一部分だけを切り出して他の人に担当してもらうことが難しい場合や、そもそも他人の能力がわからないことから安心して仕事を任せられない場合には、分業が成立しにくいのです。

したがって働きすぎて死にそうな人と仕事がなく死にそうな人が共存している状況を解消・軽減するためには、分業をしやすい環境をつくってやればよいこととなります。このような観点からは、⁽²⁾仕事内容を明確にするためのマニュアル化などは有効です。マニュアル化は非人間的だとされることがありますが、それにより他人に容易に仕事を任せられるようになり、分業に役立つという側面があるのです。

(安藤至大『これだけは知っておきたい働き方の教科書』、筑摩書房、2015年、pp.24-33より、一部改変)

問 1 下線部①「どんな人²にでも何らかの役割や居場所がある」とはどういうことか。作者の主張に沿って、200字以上250字以内で述べなさい。

問 2 下線部②を実現するためにどのようなことが考えられるか。これまでの学校、家庭、地域などでの体験や見聞をもとに、あなたの考えを500字以内で述べなさい。